氏　　名	小野　光美
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	乙第３１４号
学位授与年月日	平成２８年３月４日
審査委員	主査　教授　　齊藤　洋司
	副査　教授　　堀口　　淳
	副査　教授　　小林　裕太

論文審査の結果の要旨

わが国は急速な高齢社会に伴い多死社会を迎え，看取りの場や終末期ケアのあり方が問われている。本研究は，死の看取りを行っている介護老人保健施設（以下，老健）の特徴や関連要因を明らかにすることを目的とした。各都道府県が管理している介護サービス情報公表システムに登録されている全国の老健3,971施設の管理者を対象に，施設の属性，看取りの体制，スタッフが看取りの時期ではないかと最初に気づく入所者の身体兆候などについて質問紙調査を実施した。調査票の回答数は1,032件（回答率26.0%）で、このうち無効回答178件を除外し，有効回答854件（有効回答率21.5%）を解析対象とした。過去1年間における老健内での死亡者有りを「看取りあり群」，同死亡者無しを「看取りなし群」と定義した。2群間の比較検定には，t検定またはχ^2検定を用いて分析した。また，看取りあり群の関連要因は、ロジスティック回帰分析を用いて検討した。その結果，看取りあり群（n=698）は看取りなし群（n=156）と比較して，看取りの方針や事前指示書の作成を明確にしている施設が多かった。また，看取りあり群のスタッフが看取りの時期ではないかと最初に気づく変化は、食事量の低下などであった。さらに、看取りを行う関連要因の分析では、老健内で看取りを行う方針があり，事前指示書を作成しており，痛みの訴えにより看取りの時期と気づくことが少ないといった要因で、統計的有意差がみられた。また、看取りを行っている老健は，食事量の低下のような日常の軽微な変化により，看取りの時期を判断している可能性が示唆された。また，老健が事前指示書を活用しながら，看取りの時期までをどのように過ごしたいかといったことについて、スタッフが入所者や家族と一緒に考えることが、終末期ケアを提供する場として重要であると考えられた。